

正 信 念 仏 偈 27

■第4祖・道綽禪師

AC.562～645（84歳往生）

- ・曇鸞大師示寂後、20年後（聖徳太子 574～622）
- ・道綽禪師の幼年期＝大飢饉、天変地異、廃仏。

※三武一宗の法難（中国仏教史上、特に影響が大きかった四度の廃仏運動）

(1)北魏の太武帝，(2)北周の武帝，(3)唐の武宗，(4)後周の世宗。

⇒経典は焼き捨てられ、寺院や仏像は破壊され、僧侶は還俗（200余万人）

- ・14歳で出家。当時盛んであった『涅槃経』の研究をするが、30歳を過ぎてか

ら慧瓚えさん禪師に師事する ⇒ 理論的研究から実践的理解への転換。

※慧瓚禪師・・・釈尊の原始仏教の教団を理想とする教団。戒律と禅定を主とする実践教団の指導者。衣食住への執着を捨て、座禅に打ちこみ、悟りの空の智慧を獲得しようと専ら実践に励むグループ。

慧瓚禪師滅後の2年後、禪師48歳の時に曇鸞大師（第3祖）ゆかりの寺院、玄中寺を訪ねて、曇鸞大師の業績が記された碑文を見て感動し、浄土教に帰依。その後、日課の称名7万遍、『観経』を講ずること200遍に及んだと伝えられる。

- ・道綽禪師が70歳頃、20歳の善導大師（第5祖）が弟子となる
- ・浄土真宗における重要な聖教、『安楽集』二巻

☆道綽教学の背景

末法思想への意識

三時思想・・・正法、像法、末法

⇒ 仏教の歴史観（釈尊滅後、仏教が徐々に衰退していくという思想）



	教	行	証
正法（釈尊滅後 500 年）	○	○	○
像法（その後 1000 年）	○	○	×
末法（その後 10000 年）	○	×	×
法滅（その後）	×	×	×

『安楽集』第六大門（『註釈版〈七祖篇〉』・271頁）

第三に経の住滅を弁ずとは、いはく、「釈迦牟尼仏一代、正法五百年、像法一千年、末法一万年には、衆生滅じ尽き、諸経ことごとく滅す。如来痛焼の衆生を悲哀して、ことにこの経を留めて止住すること百年ならん」（大経・下意）と。この文をもつて証す。

→ 末法元年 = 552年

親鸞聖人『教行信証』「化身土文類」

正法・像法・末法の三つの時代が説かれた教えについて考えると、釈尊が入滅された年代は周の第五代穆王の五十三年にあたる。その年からわが国の元仁元年に至るまで、二千一百七十三年を経ている。また『賢劫経』・『仁王経』・『涅槃經』などの説によるに、すでに末法に入ってから六百七十三年を経ている。

※「周の第五代穆王の五十三年」= 紀元前 949年

⇒ 明治9年、「元仁元年（1224）」に『教行信証』が完成した年として、この年（1224年）を浄土真宗立教開宗の年として制定した。しかし、筆跡研究の進展により、『教行信証』の完成は「元仁元年」より後であることは確実。

○では「元仁元年」は何を意味する年なのか

- 1, 師法然聖人の13回忌にあたる年
- 2, 『延暦寺奏状』が出された年 → 法然一門は再び批判の渦中へ

『延暦寺奏状』第四条

周の莊王他の代を以て、釈尊出世の時と為す。その代より以来、二千年を未だ満たず、像法の最中なり。末法というべからず。たとえ末法の中に入ると雖も、尚これ証法の時なり。

天台宗は「元仁元年」は像法であるという時代認識のもと、まだ修行の成果が出るという観点から法然一門を論難。しかし、親鸞聖人は『延暦寺奏状』が出された「元仁元年」は末法であると、天台宗の開祖である伝教大師最澄の『末法灯明記』を以て真っ向から反論する。

※今日の研究では、「元仁元年」は念仏の教えの正当性を明かそうと、『教行信証』が書き始められる動機となった年と考えられている。

☆末法思想を背景とした道綽禅師の聖浄二門判

本師道綽禅師は 聖道万行さしおきて

唯有浄土一門を 通入すべきみちととく（「高僧和讃」道綽讃）